

EFL環境において臨界期はあるか

吉田研作

臨界期仮説

本来、母語習得に関する仮説

1. 脳の障害により、言語障害となった人の言語能力の復元について13歳以前に障害を受けた場合とその後の場合
2. Victor, Amara & Kamara, Genie, Isabelle, Chelsea 他
10代以降から母語を学び始めると、コミュニケーションはできるようになっても、言語能力(文法力等)はあまり獲得できない
3. 手話との関係
聾であることが分かり、手話によるコミュニケーションが4歳以前から行われる場合とその後とでは、後になってから文法力等の達成度に差が出る

第2言語習得環境における研究

1. 短期的には子どもより大人(teenager 以上)が習得が早い
長期的には子どもの方がよりnativeに近いレベルに達する可能性大
明確な critical periodの存在は未確認

一般的に、学習年齢が高くなればなるほど、nativeらしい第2言語の獲得が難しくなる、というのが一般的解釈

2. 言語要素によって獲得年齢が異なる
発音獲得が最も早い(5歳から8歳ぐらいの間)
文法力
語彙獲得にはない

3. 子どもと大人の学び方の違い
子ども → 言語習得能力の活性化可能(implicit acquisition)
大人 → 一般認知能力利用(explicit learning)

4. アイデンティティの形成
10歳前、4年以上の滞在 → 現地の人のアイデンティティを獲得する可能性
10歳後、4年以下の滞在 → 現地の人のアイデンティティに違和感

外国語学習環境の場合

本来、critical period は、その言語に日常的に接する機会が多い状況に当てはまるもので、日本のように、一週間**10,080**分(24時間×7日×60分)の内、わずか**45**分(小学校)、**200**分(中学校)、**300**分(高等学校)しか英語に接しない環境でも同じような結果が期待できるのか。

スペインでの研究 (Barcelona Project)

日本と基本的に同じ外国語学習環境

8歳から英語を始めた子どもと11歳から始めた子どもの英語力の比較

→ 4年後、8歳から始めた子どもたちは、文法能力においては、11歳から始めた子どもたちを追い抜くことはなかったが、listening comprehension と pronunciation では優位だった

cf. 谷塚尚美(2000) 実践報告と提言 早期英語教育が音素識別能力と英語学習に対する態度に及ぼす影響--日本人高・大学生を対象とした調査研究

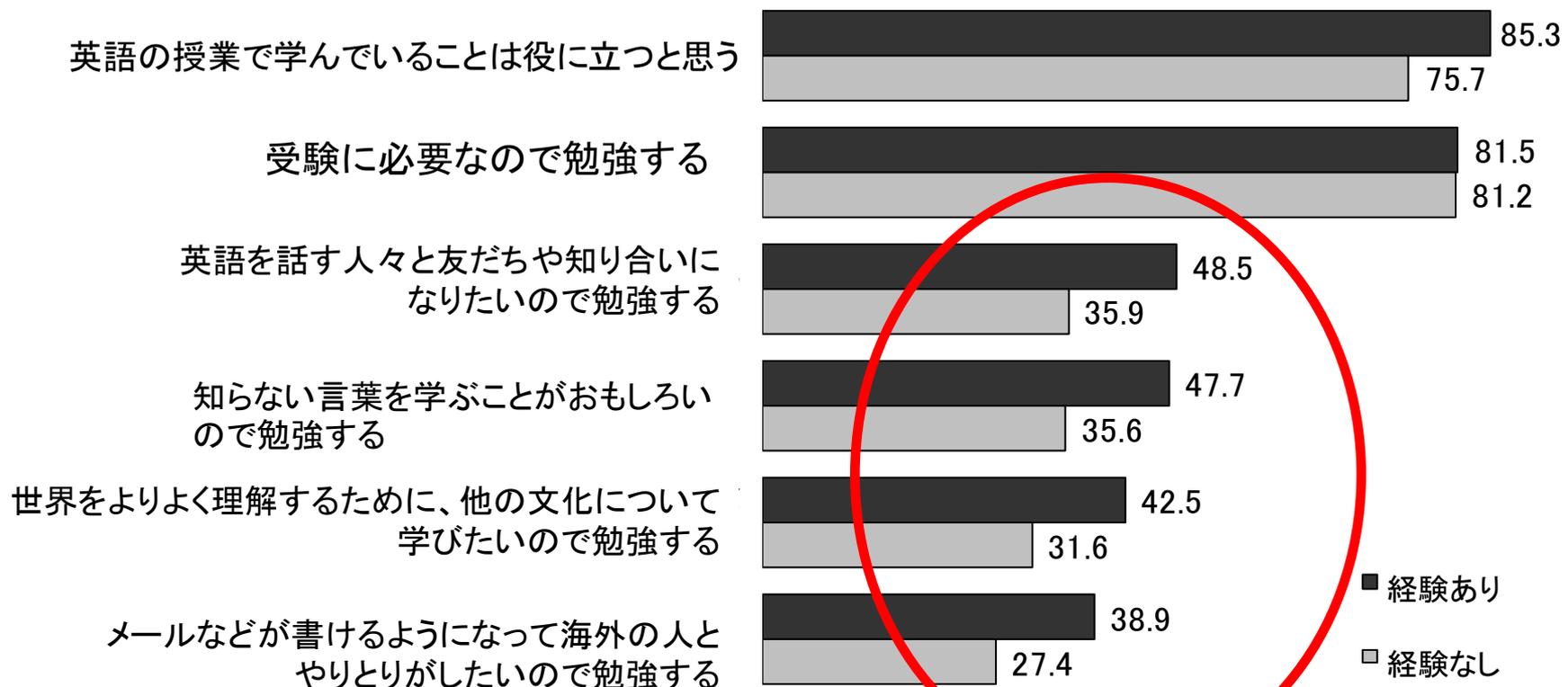
東アジア高校英語教育GTEC調査2006 (ベネッセ)

小学校での英語学習の影響

●現在の英語学習への意識

(n=1,475)

(%)



早期英語学習の中学英語学習への影響 —情意およびCan-do意識の調査から—

吉田研作、渡部良典、和泉伸一、坂本光代、森博英、鈴木利彦、豊田ひろ子 (2010)

FIGURE 3

小学校英語活動が中学生の英語意識に与える影響

(n = 733)

学習開始年齢と情意(モチベーション)

- (2) 英語は得意科目だ。 ($r = -.30$)
(3) 英単語を発音することが好きだ ($r = -.30$)

英検の取得級と情意

- (2) 英語は得意科目だ。 ($r = .33$)
(24) 外国の人に英語で話しかけられても平気だ。
($r = .30$)
(25) 学校や学校の外でもっと英語を話す機会がほしい。
($r = .30$)

学習年数と情意の間に優位な相関はない。

結論

Critical period 仮説は、本来、母語習得に関するものであり、それが、第2言語習得にも広げられたが、日本のような外国語環境で、日常的に英語に触れ、使う機会が少ない環境には当てはまらないと言われている。

英語学習開始年齢と英語力、というより一般的な捉え方をすれば、聞き取りと発音に関しては中学校以上で学び始めた生徒よりも上達する可能性はあるが、文法力などについては、あまり影響はなさそうである。また、語彙習得も年齢とは無関係。

学習開始年齢と最も関係があると思われるのは、子どもが中学や高校、また、大学に進学した際に、英語に対するモチベーションが高くなる可能性がある、という点だろう。なお、谷塚の結果、また、英検の取得級と中学生のモチベーションの相関を見ると、少なくともリスニング・コンプリヘンションと発音などの言語能力との関係も無視はできない。